

## 東京帝大所蔵の和算書に就いて

### 三 上 義 夫

先程、本誌上に昭和十二年の大震災の際に、東京帝大所蔵の和算書が焼失したやうに記るされて居たが、實は全くの誤りであり、現に無事存在して居る。其時、大學圖書館が火災に罹つたのは匿れもない事實であり、蔵書の大部分が烏有に歸したのも亦事實である。けれども多少は搬出されたものもあつた。當時の圖書館長は和田萬吉博士であつたが、災後に理科の新築化學教室の一部であつたやうに記憶するが、其處に假事務所を設けられ、私は和田館長を見舞つて、多少は運び出したと語られたのを今もまだ覚えて居る。併し其等の書物が如何なる種類のものであつたかは、私は知らぬ。又其數も多くなかつたやうに思つて居る。斯く若干の焼け残りはあつたものの、大部分否殆んど全部焼失したのであるから、所蔵の和算書も亦焼失したやうに考へられるのも、當然であるかも知れない。事情を知らぬ人は、其記事を信ずるであらう。併し事實ではないのである。

東京帝大の和算書は、左程澤山はない。冊數にして千何百冊と云ふ位のものであらう。初め菊池大麓の計畫で、上州の和算大家萩原禎助が調査に従事した事があり、其時に集めたものが幾らかあつた。中に「習齋算法」など云ふものもある。即ち藤田貞資の高弟菅野元健號習齋の筆録であつて、稍々厚い冊子二十五冊ぐらいから成るものであつた。其れが全部自筆であるから珍重に値するが、明治の末、萩原の晩年に會つた時にも特に此書を手に入れた事を話されて居たのである。

萩原の去つて後の事のやうに思ふが、川北朝鄰が所蔵の和算書を東京の大學へ差出した。川北が多年間の苦心に依つて輯録した「數理起源」約百

冊の原稿本も其中にあつた。此中には長澤龜之助の蔵書印の押したのもあるから、長澤の蔵書が紛れ込んで居たのを其儘差出したのであつたらう。

遠藤利貞の「大日本數學史」が脱稿したのは、此れから間のない事であるが、菊池大麓は甚だ之を多とし、出版の經費に就いて斡旋したのも菊池であつた。さうして此書の編纂が動機になつて遠藤は大學で和算調査に係することとなり、岡本則録や他の蔵書を借入れて謄寫したのが多かつたやうであるが、又大阪などへ出張して蒐集した事もあつた。大阪の「宅間流圓理」の數冊を得たのも、其結果である。併し遠藤は長くは大學には居なかつた。菊池大麓が大學を去つて、藤澤利喜太郎が大學の數學主任になるに及んで、藤澤は和算に興味を有すること深からず、其事業を廢したものである。

東京帝大の和算書の蒐集は凡そ右言ふ三段の手續きを輕たものであるが、萩原も長くは居らず、其れに和算の大家ではあつたけれども全然歴史の了解はなく、關孝和などの事蹟にしても後の發達に較べてはつまらないものであつたと云ふやうに考へる人であるから、蒐集の爲めに多くの努力をしたものではない。それでも和算書の目録を作つたり算家の傳記を書いたりしたのであるから、今少し經費を支出して便宜を與へたならば、其頃にも可なり蒐集は出來たであらうと思はれる。併し多く購入したやうでもないし、又出張して調査するなど云ふ事はなかつたらしい。

川北は單に蔵書を差出しただけであつたらう。最も京都へ行つて吉田光由の事蹟を調べて來たものや、關流宗統の目録などを書綴つて差出したものはあつた。

遠藤は既に「大日本數學史」の著者であり、古算書に對する了解もあつたが、大學で調査をする事にはなつたものゝ、矢張り經費が充分に支出されたのではなく、算書蒐集の便宜と言つて知れたものであつたらう。尤も其頃には古算書も随分豊富にあつたらしいし、代價も極めて低廉であつた

から、盛んに買入れたならば餘程集める事も出来たらうと思はれるけれども、さう云ふ結果は見られなかつたと思はれる。

此時代に於ては同じ書物は唯一部だけあれば、それで充分だと考へ數多く集めて比較研究しようなど云ふ考へは、全くなかつた。算家の事蹟にしても、某書に何とか書いてあれば、直ちに之に依據したもので、多くの史料を求めて正確な史實を闡明しようなど云ふ事は、全く念頭に往來する事もなかつたのであらう。さう云ふ譯で、同一の書物を二部重複して集めるやうな事でもあつては、却つて失策だと云ふ風にも思つて居た。遠藤は一生を通じてさうした考へで居たのである。こう云ふ譯であるから、書物が數多く集められなかつたのも、不思議ではない。

然らば東京帝大の和算書が、僅に一二千冊に過ぎないと云ふのも、當然の結果である。併し冊數は少ないながらも、貴重な算書類が其中に包含されて居ることも亦勿論であり、將來長く和算研究の資料として役立つであらう事は論を俟たない。

帝國學士院に於て菊池大麓が擔當會員になつて、和算史調査を始めたのは、明治三十九年であつたが、遠藤利貞が囑託の命を受け、調査並に算書蒐集に當ることになつた。其調査と云ふのは、和算の遺題承繼の諸問題と和算の整數術の研究とであつた。數年間を要して、原稿も随分嵩ばつたものになつて居る。併し最初には學士院に何等の資料もなく、東京帝大で前に集めたものを全部取纏めて借入れ之を基礎として着手したのである。其借入の年月は今私の手許では判然しないが、三十九年末か明治四十年頃であつたやうに思ふ。それから學士院では段々と和算書類も集まつたけれども、すつと後までも帝大の算書も學士院に置いてあつた。

川北朝鄰が自著「數理起源」などを筆寫して、伊藤雋吉、長澤龜之助、林鶴一の三人に提供したのは、帝大の了解を得て學士院から借りて寫したものであつた。其中にて長澤所蔵の分は大正十一年同氏小石川小日向臺町の邸の火災の爲めに焼失したが、伊藤氏へ供給されたものは、同氏歿後に

所蔵算書類全部を學士院へ寄附された中に存在する。

斯くて大正十二年九月一日の大震災に逢ひ、帝大圖書館は焼けたけれども、上野公園美術學校構内にあつた學士院は幸に災厄を免かれ、従つて帝大所蔵の和算書も亦無事に残ることが出来たのである。其後學士院の新築が出来てからも矢張り院内に置いてあつたが、昭和六七年頃であつたか、東京帝大圖書館へ返却された。

「日本古典全集」中に古代數學集として「塵劫記」も亦刊入された事は知る人も多いであらう。此れは東京帝大所蔵の寛永十一年の刊記のある本に據つたものであるが、元と假名書きであつたのを漢字に改めたところなどあることは、私も其當時から困つた事をしたものと思つて居る。古代と云ふ二字を用いたのも、固より穩かでない。此刊行については與謝野寛が山田孝雄氏の紹介で尋ねられ相談に預かつたし、刊行の五書は私が撰定したのであるけれども、其以上に私は關係はなかつた。其刊行は昭和二年であつたが、解題に「塵劫記」に就いて、

寡聞なる編者は、纔かに帝國學士院本（東京帝國大學寄託本）東北大學本林鶴一博士本、其他東京の某々兩氏の二本等の現存を知るのみである。茲に「日本古典全集」の底本には、「割算書」と同じく藤澤岡本兩先生の御厚意に由り、「帝國學士院本」を筆寫し撮影するの幸を得た。但し跋文に有る如く、初板にあらずして寛永十一年（一六三四）三月の再板本である。

と見えて居る。即ち東京帝大所蔵で、學士院へ寄託されて居る「塵劫記」に據つた事が明記されて居るのである。此の覆刻の「塵劫記」に注意される程であれば、原本の所在を考へたならば、當然、此引用の文に據つて東大の和算書中に焼失しなかつたものゝつた事が判る筈であり、それから推しても焼失云々の事は必ず再考されなければならないのである。

「塵劫記」に就いては、雑誌「書誌學」（第十二卷三卷、昭和十四年三月發行）に禿氏祐祥氏の「寛永版塵劫記の類版」と云ふ興味ある論文が出て

居るが、寛永年中刊行の「塵劫記」十二種を挙げ、其第六種本と云ふのは寛永十一年刊で、即ち「古典全集」覆刻のものに相當するが、之に關して第六種本は東京帝國大學圖書館に寄託されてゐる帝國學士院藏本中に存し、數年前に古典全集に收めて刊行されたから、廣く知られてゐる。と見える。此れは明らかに東京帝大と學士院とをあべこべに思ひ誤つたものに違ひない。

又第五種本と云ふのは、三卷四十八節本で、寛永八年刊自筆署名あるものとし、

第五種本は池永孟氏が完本を入手されたとのことであるが、曾て小林文七氏もこれを所蔵し、色刷本の既に寛永年間に存在することを主張されたことがあり、その零本は科學博物館にも所蔵せられ、また東京帝國大學圖書館と平塚運一氏方とで見ることがある。自筆署名は寛永八年六月となつてゐるから、開版の年代も明瞭である。署名には花押と朱印とを添へてゐるから、これを疑ふの餘地はない。

と説いて居る。

こゝにも東京帝國大學圖書館とあるが、大震災後同館に入手されたものであるならば、私は固より知らぬ。けれども其以前からあつた和算書中には此種のはなかつた。然るに帝國學士院には遠藤利貞舊藏の下巻零本一冊があり、自筆署名があつて、色摺が附いて居る。恐らくこゝにも東大と學士院とをあべこべに間違へたのではないかと思はれる。此れは言ふまでもなく、第六種本に關する間違と關聯するのであり、別個のものであるまい。

此種の事は學說の上には、別に關係はない。併し如何に誤傳が傳へられ易いかを示めすべき好個の一例とはならう。

禿氏の「塵劫記」に關する書誌學的研究は、確かに注意に値する。同氏が初版本とされるものは、私も未だ見た事がないし、「東北數學雜誌」に平山諦氏が發表された「塵劫記及改算記目錄」にも所見がないから全く世に

稀なものであらう。「塵劫記」に偽版があつた事は、著者の記述で明らかであるが、未だ確實に偽版と指摘されたものはない。平山氏は書中に誤偽の有無に依つて調べ出すことも出来ようと云ふやうに述べられたけれども、光由傳の所載から見ても、誤偽と云ふのは左までのものとも思はれず、此れは恐らく判斷の標準にはならない。東大所蔵の寛永十一年本は跋文に色摺を用ひて正邪を訂すと云ふやうな事は記るされて居るが、書中に色摺はない。それと云ふのは普及版と云ふやうな意味で色摺を省いたのであらうか、若くは此れが偽版の一つなのであらうか。私は未だ此點を明瞭に判斷することは出来ないが、併し考慮の中に入れて然るべき一つの要點であらうと思ふ。此本は焼失したと云はれる東大和算書中の一で實は無事に残つてゐるのであるから、其點に關しても充分の研究の行はれる機會のあらう事を望む。

序に言つて置くが、塵劫記には朱と墨の二色摺だけではなく粗末ながら黄色青色にも摺り加へたものがあるから、此點は平山氏の記述を補つて置く。尤も東大所蔵本の中には色摺塵劫記はなかつたやうに記憶する。

塵劫記作者に關しては數年前に一篇を作り昭和十三年五月の史學會大會に際し、國史部會に於て「塵劫記著作攷」と題して結論だけは説述して置いたが、未だ刊行して居らぬ。併し問題外であるから、今は論及を省く。